1　主題構成表

主題名　「働くことの喜び」（小学校・中学年）　　資料名　「美しい山河を未来に－デレーケ」

■　内容項目　４－（２）

働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く。

■　価値の分析

・働くことの大切さとは、単に自分や家族が生活をしていくためだけの手段ではなく、自分に課された社会的責任を果たすという意味においても重要な意味をもつ。

・この時期の児童は、係の仕事や頼まれた仕事に対して、進んで取り組もうとすることができる。しかし、興味がもてなかったり、必要感を感じなかったりするなどにより、時に取り組むことができないこともある。自分の役割を果たし、力を合わせて取り組むことが、周りの人の役に立ち、その喜びを自分の更なる働くことへの喜びにつなげることができるようにする必要がある。

■　内容項目から見た児童の実態

（意識）

・係の仕事や与えられた仕事など、受けもった仕事は責任をもって取り組まなければならないと考えている。

・当番活動や係活動において、興味・関心のある活動には、意欲的に活動するが、そうでない仕事には、人任せになったり、最後まで取り組もうとしなかったりする。

（要因）

・係や仕事には責任があり、果たさなければならないことは理解しているが、そのことが自分や周りの喜びにつながることにまで気付くことができていない。

・自己中心的な考えがあるため、興味のないことに関して責任をもって取り組むことができない場合がある。

・自分の仕事が仲間や周りの人の役に立っているということに気付くことができず、働くことへの満足感を味わった経験が少ない。

■　資料の分析

・水理工師であるオランダ人デレーケは、自国のため、自分を認めてくれた技師長のため、自分の力を発揮するために来日する。木曽三川の改修を任されていたとき、５年連続で起きた洪水の事実から、設計図を書き直す必要があった。やがて工事が遅れ、彼自身批判を受けることになるが、水理工師として、地域住民が安心して生活できることだけを考え、工事の続行を決意した。自分の役割を果たし、取り組むことが自分や周りの人の喜びにつながり、進んでみんなのために働くことの素晴らしさに気付くことができる資料である。

・妻の死によって、仕事への情熱を失いかけたデレーケの思いに共感させる。

・木曽三川流域では、水害との闘いの歴史から、自分の水理工師としての役割を果たすことが、地域住民の安全な生活を実現し、彼らの喜びにつながることに気付かせることができる資料である。

■　ねらい

自分の仕事や活動を行い、役割を果たすことが自分や周りの人の喜びにつながることに気付き、みんなのためになることを考え、進んで働こうとする心情を育てる。

■　展開の構想

・デレーケの心に情熱の火を灯した理由を知ることで、上司の信頼に応え、自己の力を発揮することに価値を見出しているデレーケの心に気付かせる。

・住民からの温かい言葉が、仕事の再開へとつながったことから、働くことの意義が、自己の力を発揮することだけではないことに気付かせる。

・水理工師として住民のことだけを考え仕事している姿から、役割を果たすことが周りの人の喜びや安心につながることに気付かせる。

■　基本発問（◎中心発問）

○デレーケは、ドールン技師長から、来日の依頼をされたとき、どんな気持ちだったでしょう。

○妻を亡くしたとき、デレーケはどんな気持ちだったのでしょうか。

◎デレーケが設計図を書き直す決断をしたのは、どのような気持ちからでしょうか

○これまでの係や、当番活動の中で、自分が取り組んだことで、周りの人や友達の役に立ったと感じたことはありませんか。

■「わたしたちの道徳」の活用（　授業前　・　授業中　・　授業後　・　活用しない　）

（活用の仕方）係活動を振り返る際に、「学校や学級でみんなのためにできること」（Ｐ.１３２）を記入し、よりよい取組方法を自分で決めて実践する。

2　学習指導過程

	基本発問と予想される児童の反応	指　導・援　助
導入	◇デレーケの経歴を紹介し、資料への興味・関心を高める。 **〇今日は「美しい山河を未来に（木曽三川治水の恩人）」という読み物資料を使って学習します。主人公のデレーケについて紹介します。**	・当時の洪水の状況や治水工事の方法について伝える。 ・オランダは低い土地が多く、先進的な治水技術があったことを伝える。 ・年表をもとに、人生の半分程の時間を日本で過ごしていたことを経歴から示す。
展開前段	◇資料提示をし、範読する。 **〇デレーケは、ドールン技師長から、来日の依頼をされたとき、どんな気持ちだったでしょう。** ・ドールン技師長の期待に応えて頑張りたい。 ・やっと認めてもらえた。 ・自分の力を発揮したい。 ・オランダの技術を日本で示したい。 ・オランダ人としての誇りを大切にして頑張りたい。 **〇妻を亡くした、デレーケはどんな気持ちだったのでしょうか。** ・自分も妻も育ったオランダにいたい。日本で仕事をするのはもうやめたいな。 ・住民の言葉が自分の支えとなった。住民の期待に応えるためにも、仕事を再開しよう。 **◎デレーケが設計図を書き直す決断をしたのは、どのような気持ちからでしょうか。** ・書き直さなければ、また洪水が起こり、住民の人たちが困るのではないか。 ・今のままでは、住民の人は安心して住むことができない。 ・このままでは、仕事をやりきったことにはならない。 ・自分のためではなく、住民の暮らしのことだけを考えて、安心して生活できるようにするために決断した。 ・オランダの誇りとかというものではなく、一人の水理工師として、住んでいる人たちのために決断した。	・デレーケの年表や洪水回数の移り変わりなどの表を掲示しておく。 ・ドールン技師長からの手紙の絵を示し、注目させることで、技師長の期待の大きさや、それに応えようとするデレーケの思いを想起できるようにする。 ・感じている満足感は、住民に安全な暮らしを提供できるようになったことではなく、技師長の期待に応えることができたことや、自分の力を示すことができたことによるものであることを押さえる。 ・温かい言葉をかけてくれた住民からの期待に応えるために、調査を再開したデレーケの思いを押さえる。 **【深めの発問】** **★設計図を書き直すことは、期日が遅れ、早く工事をしてほしいという住民の期待を裏切ることになり、また批判されるかもしれないのに、なぜ書き直す決断をしたのか。** ・技師長の期待に応えることや、自分の力を示すことではなく、水理工師として、地域住民の安心、安全な暮らしのことだけを考えていることに気付かせる。
展開後段	**〇これまでの係や当番活動の中で、自分が取り組んだことで、周りの人や友達の役に立った、自分もよかったと感じたことはありませんか。** ・日直で窓を開けたとき、教室に入ってきた子が、「気持ちいい風」と言ってくれて、ちゃんと日直として窓を開けてよかったなと思いました。 ・手洗い場を掃除していたときに、「きれいになったね」と言ってもらえて、掃除したことがみんなのためになった気がしてとてもうれしかったです。	・掃除の時間や係活動の様子など、具体的な場面を想起することができるように、活動場面の写真を掲示する。 ・発表の場面で、価値付けられた内容のみを発表した児童には、価値付けられてどのように思ったかと問い返すことで、自分の喜びにもつながっていることに気付かせる。
終末	◇教師の説話をする。 ・係や当番活動の様子から、みんなが気持ちよく生活できるよう取り組んでいる姿や思いを紹介する。	**＜変容の見届け＞** ・「トイレ掃除をする中で、汚れた便器をきれいにしようと頑張ったことで気持ちよく使ってもらえるようになったことがうれしかった。」など、自分の役割を果たすことが、自分やまわりの人への喜びにつながることに気付き、実践への意欲を高めている。

３　道徳の時間（本時）と他の教育活動との関連

＜場の内容・ねらい＞

教科等
・ペアや班での話し合いや活動を仕組み、仲間に働きかけること、協力することが経験できるようにする。また、できた姿を価値付ける。

帰りの会
・「よいこと見つけ」の中から、当番活動や係活動についての内容のものを取り上げ、その姿や、その時の思いを具体的に紹介する。

【日常の活動】
〇朝の会
・班の中で係のめあてを決めることで、活動する内容を明らかにする。

〇清掃活動
・めあてを決めたり、掃除の場所や清掃方法を教えたりすることで、懸命に取り組む姿を生みだし、その姿を価値付けることができるようにする。

道徳の時間（９月）
「美しい山河を未来に」
内容項目　４－（２）
・自分の仕事や活動を行い、役割を果たすことが自分や周りの人の喜びにつながることに気付き、みんなのためになることを考え、進んで働こうとする心情を育てる。

学級活動（１０月）
「係活動を振り返ろう」
・「わたしたちの道徳」の「学校や学級でみんなのためにできること」（Ｐ．１３２）を使い、自分の取組の中で心がけていることや努力していることを記入する。

〇係活動
・班の中で分担をし、一人一人が取り組む内容を明確にすることで、責任をもって最後まで活動する姿が生まれるようにする。

＜児童の意識＞

・班での活動は、全員が参加できるように互いに声をかけ合ったり、うまくできるように協力したりすることが大切だ。
・自分の決められた仕事を精一杯することが大切なんだ。力を抜かないで取り組んでいこう。

・一生懸命に掃除することができて、気持ちよかった。
・掃除したところをほめられて、嬉しかった。これからも精一杯掃除しよう。

・デレーケさんは、水理工師として、自分にできることを考え、責任をもって最後までやり遂げた。そのことが、住民のためになり、彼らの喜び、自分の喜びにつながっていた。

・係活動にこれまで取り組んできて、自分が精一杯取り組むと、まわりの子が喜んでくれることが分かった。
・他にも自分がやれる係活動がありそうだ。自分からもっとやってみよう。

＜指導・援助＞

・係の仕事を通して、仲間へ働きかける姿があるか、またその声に応えようとする姿があるかを見届ける。また、その姿を価値付ける。
・班内で協力して声をかけ合う姿を見届け価値付ける。

・「よいこと見つけ」の交流以外でも、目立たないところで精一杯活動している姿を取り上げ、意欲を高める。

・働くことの意義が、自己の力を発揮することだけではないことに気付かせる。
・水理工師として住民のことだけを考え仕事している姿から、役割を果たすことがまわりの人の喜びや安心につながることに気付かせる。

・係活動に取り組む児童の意識を事前に把握する。
・自分の行っている活動が、まわりの仲間の喜びにつながっていることに気付かかせ、更なる活動の工夫へと結び付ける。

美しい山河を未来に（木曽三川治水の恩人）――デレーケ

デレーケは、美しい海と陸に囲まれた、生まれ故郷ゼーランドが大好きだった。ゼーランドは、ネーデルランド（低い土地）とも呼ばれ、低地が多いオランダの中でもとりわけ海抜の低い地方として知られていた。

オランダの国土は、四分の一が海面下にある。オランダ人は、長い水との戦いを経て、干拓（湖や海の水を除いて陸地や耕地にすること）と運河によって国土を築いてきた。

祖父がそうであったように、父も、デレーケも水との戦いに参加してきた。デレーケは、労働者の息子なので国立工科大学には進学できなかった。しかし、向学心にあふれ、進んでリブレット先生について水理学を学んだ。アムステルダム運河組合の現場監督として働きながら学んだ日々は、デレーケの水理工師（港湾、河川土木技師）としての技術を大いに高めてくれた。

ある日、一通の手紙が来た。日本にいるドールン技師長からだった。

「日本に派遣されるのは、国立工科大学を出たエリート技師ばかりだが、君が彼らに負けない技術と情熱をもっていることは、一緒に仕事をしてきた私が一番よく知っている。日本は、今、君のような優秀な治水の技術者を求めている。…」

その手紙は、デレーケの心に情熱の火をともした。自分を水理工師として認めてくれる人がいる。オランダ人として、美しい国土づくりに参加してきた誇りがある。今、自分を信頼してくれる上司の元で、自分の力を日本の国づくりに役立てることができる。

明治六年（一八七三年）、デレーケ三十歳のときに、妻ヨハンナ、二人の子ども、義妹エルシュと共に日本に着いた。

デレーケが最初に任された仕事は、淀川水系（淀川を中心とし、淀川を流れ

る支流・湖・沼など）の改修工事だった。

デレーケは、海からながめた山河と現地調査で見る山河の違いにショックを受けた。

山が荒れ、狭く急な川は、大雨のたびに土砂が川底をうめ、ますます洪水を起こしやすくしていた。

「エッセルさん、『治山治水』というのは本当に大切ですね。人の心が荒れ、余裕がなくなると目先のことばかり考えて木を切ってしまう。この国に住む人を責めるわけにはいかないのですが、何としてでも美しい山河をとりもどしたいですね。」

「でもねえ、デレーケ君、日本の河川工事は難しいよ。大学で学んだ知識や技術だけでは、これほど急な川の工事はできないからね。僕は、君が現場で学んだ知識と技術に期待しているからね。頑張ってオランダの技術を示してやろうじゃないか。」

明治八年、日本で最初の近代技術による砂防堰堤が淀川水系に造られた。これは、〔オランダ工法〕または、〔デレーケ工法〕とも呼ばれた。自然を破壊することなく自然を生かしてダムを造る方法である。この工事は、明治十一年から南濃町の盤若谷、羽根谷などでも行われるようになった。羽根谷巨石堰堤は、百年を過ぎた今もその役割を立派に果たしている。さらに、淀川本流改修工事によって、それまで船底がつかえて通れなかった大型の船も通れるようになった。

十年後、淀川上流の山地に施した砂防工事の結果、山々は緑となってながめも美しくなった。そして、山くずれも少なくなり、川の流れも安定していった。

こうして、デレーケの評価は高まっていった。彼は、つぎからつぎへと合理的な工法を提案し、適切に指示、指導できる技術者に成長していった。

デレーケが初めて木曽三川の視察に訪れたのは、明治十一年（一八七八）二月下旬のことだった。視察に訪れるようになったきっかけは、下流域に住む人々

の熱心な運動と、岐阜・愛知・三重の三県一体の政府への要求が認められたからである。

この地域は、濃尾平野と呼ばれており、日本でも有数の洪水地帯であった。大小二百余りの河川が網の目のように流れ、その大部分は木曽川、長良川、揖斐川に合流していた。また、水位に違いがあり、東の木曽川が最も高く、長良川、揖斐川の順にかなり低くなっていた。木曽川の流す土砂が異常に多く、その土砂が水位の低い長良川、さらに揖斐川に流れ込み洪水を起こしていた。

デレーケは、「川を治めるには、まず山を治めるべし」という信念に基づき、この調査結果を『木曽川概説』にまとめ、次のような三つの報告を政府にした。

一　山林の木をむやみに切らないこと

二　禿山の木の植えつけと栽培を行うこと

三　砂防工事を行うこと

このときデレーケは、木曽三川の乱流のすさまじさに気づいてはいなかった。だから、三川分流をしなくても木曽川と長良川・揖斐川の二川分流で治水できると考えていた。

明治十四年に最愛の妻を亡くしたデレーケは悲しみのあまり仕事への情熱をなくしかけていたときもあったが、木曽三川住民からの心のこもったおくやみの言葉を受け、住民の期待に必死になって応えようとして調査を再開した。この日から、デレーケと木曽三川との本当の戦いが始まった。

明治十六年（一八八三）七月に、五年連続の洪水が起きた。この事実を知ったデレーケは、今までの改修工事の考え方を土台から見直すことにした。一番大きな見直しは、二川分流から三川分流へ設計図を変更することであった。

「どうして、この設計図ではだめなのですか。これはあなたが私たちに指示して書かせたものじゃないですか。」

「なぜだめなのかというと、あの七月の洪水の恐ろしさを一番よく知っているのは君たちじゃないか。私は、イギリス人の批判も知っている。山のないオラ

ンダ人に日本の河川改修工事の設計図は書けないと。しかし、オランダで学んだ水理学と、日本の河川で体験した事実をもとに私なりの理論を築いてきた。その上で、私は設計図を書き直す必要があると判断したんだ。」

「しかし、設計図を書き直すには、もう一度現地調査をしなければなりません。それだけ改修工事に取りかかるのが遅れます。地元の人々は、あなたこそがこの木曽三川を治めてくれる人だと期待しているのです。その期待を裏切ることになります。それに、あなた自身、また批判をあびることになりますよ。」

「批判などなんでもない。私は土地の人から聞いた宝暦治水の話に感動した。しかし、その後も水との戦いにあらゆる努力をし、命と財産を守ろうとしてきたことも事実だ。これは、オランダ人も日本人もない。まして、私一人の名声など問題ではない。私の願いは、西濃地方に住む人々から木曽三川の洪水の不安を取り除き、安心して生活できるようにすることだ。そして、美しい山河の故郷をつくる。そのために設計図を書き直す。分かってくれないか。」

明治十八年十一月、木曽三川改修工事の設計図は完成した。

工事区域は、一五八・五キロにもおよぶ大工事であった。着工から二十五年後の明治四十五年に工事は終わった。

木曽三川改修工事の最大の成果は、水害の減少である。また、水害の減少により木曽三川流域の農業も改善され、耕地が増加した。さらに、近代的治水工事の成功は、全国の河川改修工事を進める模範になった。

内容項目　四―（二）

出典　海津郡教育振興会編「ふるさとゆかりの人々」（平成十五年一月）